

唐丹の民話・19話「本郷地区」

本郷の庵寺

福寿庵と梵鐘



平成19年2月

唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ

目 次

一本郷・福壽庵と梵鐘―

唐丹民話の再話著作にあたって	2
1. 福壽庵	4
(1) 本尊十一面観音の由来	4
(2) 十一面観音について	5
2. 大飢饉祓いにあげた梵鐘	5
(1) 歴史的にも古い鐘	5
(2) 梵鐘をあげた人たちの名まえ	6
(3) 半鐘として命拾いした梵鐘	7

唐丹民話の再話著作にあたって

唐丹公民館の自主パソコンクラブ（設立：平成17年6月／名称：唐丹・愛ちゃんネットクラブ）では、パソコンによる文章作成を習得した証と民話を伝承する狙いを含めて民話の再話著作活動を実施しました。

文章作成の教材は、釜石民話の会（平成2年発足）の機関紙「釜石民話」を活用させていただきました。

この釜石民話の中から、唐丹に関り、かつ再話できるものを選び。その根底にあるものを変えないことを基本に「見やすく」、「読みやすく」、「分かりやすく」するために小見出しを付け、写真や絵図などを挿入。できるだけ、関連する歴史や実話を織り込みながら作成しました。

いつの日か、この冊子が誰かの目に留まり、唐丹のもこんな話があったのかと唐丹の「いにしえ」に思いをはせる一助になれば幸いです。

おわりに、この活用させていただいている民話は、釜石民話の会会員でありました唐丹町片岸の加藤ムツさんが採録（聴き取り）したものであり、第1集から第6集に掲載の民話の数は92編を数えます。

加藤ムツの民話を伝承したいという、この熱意と努力に敬意を表するとともに、故人とられました加藤ムツさんのご冥福をお祈り申し上げます。

なお、この物語の「本郷の庵寺福壽庵と梵鐘」は、釜石民話第3集「福壽庵の鐘」を再話著作したもので、その原文は次のとおりであります。

本郷、昭和五十五年盛岩寺二十三世住職亮海書福壽庵、と書いた扁額が正面にあがっている庵寺があります。

其所の鐘は青銅ではあるけれども、金でもふくまれているのか、小さいながら由緒あるように見受けられ、音質もよいということです。丈50糎ぐらい直径35糎ぐらいでしょうか。鐘の横に「享保18年丑年12月導師 宗心取次三之助と書いてあります。念仏講 諸行無常 是生滅法」と40人ぐらいの人々の名が連れて書彫ってあります。

かつての三陸津波に流され鐘の中ほどはくぼみができ切れて傷んでおりますが、ひろわれて一度は半鐘として用いられた事もあるようで

すが、今は福壽庵の鐘として人々の信仰のもとに大事にされております。

亭保18年は今から250年余り前です。此の年代には此の地方は凶作で大飢饉が続き此の地の人々が梵鐘としてあげたもののようです。

本郷 曾根としえさんの話

本郷の庵寺福壽庵と梵鐘

1. 福壽庵

本郷に「福壽庵 昭和55年 盛岩寺廿三世 亮海書」と亮海大和尚が揮毫された扁額が正面に掲げられている庵寺があります。



(福壽庵)

この庵寺は、昔から多くの善男善女にお参りされてきました。

昭和8年3月3日の大津波に流され、しばらく屋敷跡を残したままでしたが、昭和55年部落の人たちにより再び建てられました。

(1) 本尊十一面観音の由来

本尊は、十一面観音です。この十一面観音は、今から約1170余年以上も前（大同2年・平安時代前期）に、征夷（せいゐ）大將軍・坂上田村麻呂が蝦夷（えぞ）軍の総司大墓王（たものきみ）を滅ぼし、その残党である常龍鬼を唐丹の村で倒しました。

この鬼とは、大和軍が敵の強い大将に名付けた言葉であったことから、その常龍鬼こそ、真の蝦夷の大将でありました。

ところが、この霊は怨霊（おんりょう）として荒びたため、この霊を鎮めることを祈って、山の上の一角にお御堂を建て、十一面観音像を祀ったため、神さまと仏さまを一緒に信仰することになりました。

明治2年には、神さまと仏さまを一緒に祀ることが禁止され、この十一面観音像は福壽庵に移されましたということです。



(常龍鬼碑)

(2) 十一面観音について

十一面観音は、七観音（千手、十一面、聖、如意輪、准胝、馬頭、不空羅策）または、六観音の一つです。



(十一面観音立像)

頭には、十一面の小面（菩薩面、忿怒、笑面など）をつけた観音で、救済の働きが多面的あることを象徴しています。本面を足すと十一面のものや本面以外に十一面あるものもあり、十一面のつけ方もいろいろなそうです。

2. 大飢饉祓いにあげた梵鐘

(1) 歴史的にも古い鐘

この庵寺には、250年余り前の享保18年丑年、(1733年江戸時代の中頃)に、この地方の念仏講の人々があげた(献納)梵鐘があります。

この年代には、この地方は凶作で大飢饉がつづきました。

この飢饉を祓うために、梵鐘としてあげたといわれています。

青銅ですが、小さいながらも由緒があるように感じられ、鐘の音色も良く、金がふくまれているとの噂もあります。高さは40~50糎、直径は、35糎ぐらいで、鐘の周り4面には、念仏やあげた人たちの名前が彫られています。



(庵寺の梵鐘)

(2) 梵鐘をあげた人たちの名まえ

その梵鐘に彫られているのは、つぎの人たちです。

● 諸行無常 是正減法

念仏講人数

善三郎内、又十郎内、権之丞内、伊三郎母、源七内、
平十郎母、仁右エ門母、酉助母、喜右衛門母

● 生滅々已寂滅為樂

儀兵衛内、又左衛門内、武兵衛内、平七母、勘三郎内、
清之助内、善兵衛母、市兵衛内、万三郎内

合拾九人：武兵衛、平七、又左右衛門、三之助内、儀兵衛

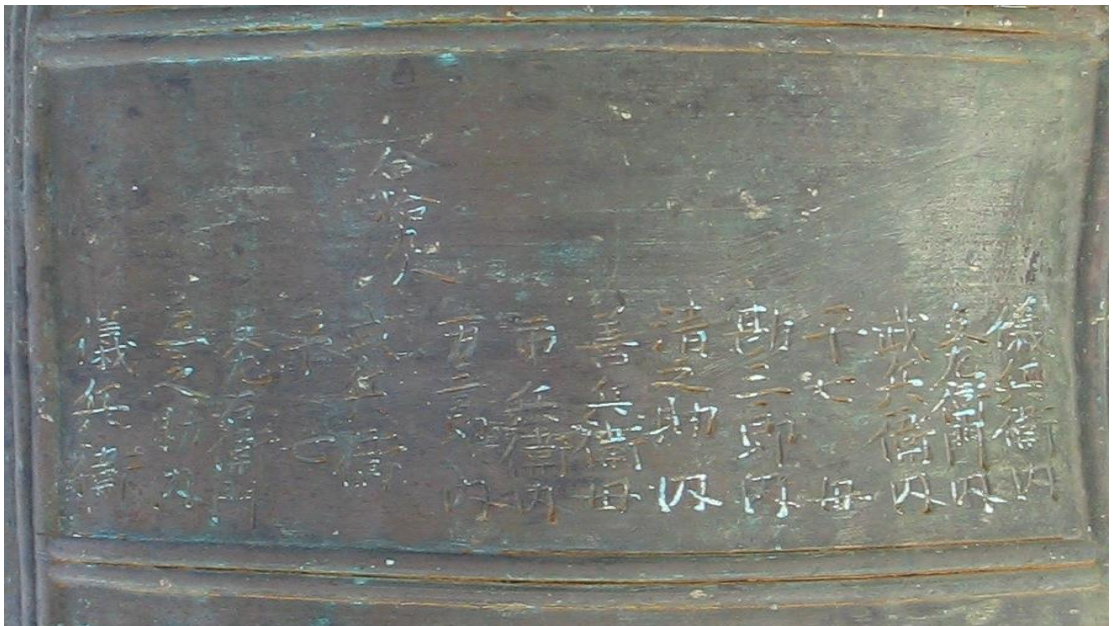
● 迷故三界城 語十方空

又兵衛、善兵衛、二右衛門、五郎吉、喜助、平十郎、市兵衛、
又十郎、瀬兵衛、久三郎、利兵衛、万四郎、彦十郎、
儀右衛門、源之丞

● 本來無東西 何所有南北

仁助、長三郎、善四郎、長左衛門内、八郎平、おはつ、
助八先祖、三七、とら母、

享保十八丑年十二月 導師・宗心 取次・三之助



(梵鐘をあげたひとたちの名まえの一部)

(3) 半鐘として命拾いした梵鐘

この鐘をあげたころは、海中山盛岩寺にあったようですが、のちに福壽庵にうつされたとも伝えられています。

長い月日の内には、火災や津波に遭ったり、また、半鐘として使われたためか、くぼみができたり、裂けたりと傷んでいるところもあります。



(海中山・盛岩寺山門)



(痛んだ梵鐘の一部分)

太平洋戦争のときは、兵器をつくる資源が不足したため、金目のものは国に納めさせられましたが、部落の人たちは、火事や空襲を知らせるための半鐘だと言い張り納めることを免れました。

享保18年(1733)の製作は、釜石地方では古く、ちなみに、日本で最も古い梵鐘は、638年の文武天皇(寧楽時代前期・白鳳時代)のもので京都の妙心寺にあるそうです。

おしまい

◎釜石の民話・第3集：福壽庵の鐘

○話し手：曾根としえさん／大曾根

○聴き手：加藤ムツさん／片岸

●再話著者：中山志恵／小白浜地区

(唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ)

●写真撮影者：新沼裕／本郷地区

(唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ)

●校正指導者：新沼裕／(同上)

(唐丹・愛ちゃんネットパソコンクラブ)

●再話完成：平成19年2月